

「呼び出されて」

エペソ人への手紙 4 : 1 - 3

July.16.2023

エペソ人への手紙 4 : 1 - 3 (パウロ)

Preface

先週より、エペソ書 4 章の内容に入りました。

3 章まで語ってきた神のご計画、目的、原理、約束、希望などを、私たちがこの地上の生においてどのように実践していくのかということについて、4 章から語っていきます。

今朝は、特に、4 : 1 の「召されたその召しにふさわしく歩む」ということについて考えていきたいと思っております。

私たちクリスチャン・キリスト者は、召された者たちです。

「召された」とは、「呼び出された」という意味です。

英語の聖書では、「召し」という言葉を、そのものずばり「C a l l i n g」と訳しております。

つまり、「誰が私たちを呼び出したのか」という質問に対して、「神さまが私たちを呼び出したのであって、私たちが神さまを呼び出したのではない」ということから出発をするということです。

昔、ドリフのコントで、神社の社に眠っている神々を、天上からぶら下がっている大きな鈴を鳴らして呼び出して、その神を困らすというコントがありましたが、あれと同じような感覚で、創造主なら神さまを考えてしまっていないだろうか、いつまでもそのような幼い幼稚な方法でしか神と接することが出来ないのではないだろうかと考えることがあります。

私たちの思いや計画や願いを叶えて頂くために、神なる存在が必要であり、それらを叶えてくれることをもって、神のご臨在だったり、祈りの応答だったりを押し量ってしまう。

Part One

例えば、私たちのうちどれくらいの人が、祈る時、「主よ、主が私に求めておられることは何でしょうか？ 主よ、あなたが私をお造りになられた、私をお呼びになった理由は何でしょうか？ あなたが私を呼び出した理由を、今日という日、生きることが出来ますように」とお尋ねする場として、祈りの場を、祈りの時を考え実践している人がどれくらいいるのでしょうか？

私たちは、召された、呼び出されたその呼び出しの内容にふさわしく歩むよう求められています。

私の計画や目的をもって、「それを願った通りにして下さらないと困りますよ」

と訴え願ひ、熱心を傾け、神さまを自分の方に向ける、または引っ張り出してくるような祈りにも、当然、神さまは私たちの弱さや未熟さをよくご存じでありますから、聞き、知り、見て、応えて下さいますが、それが祈りのすべてでもなく、祈りの本筋でもないでしょう。

私たちがどれ程に祈りを分かっていないかと言いますと、ローマ書やヘブル書で、「私たちは、何をどのように祈ってよいか分からないので、聖霊なる神様ご自身が、言葉にならない呻きをもってとりなしていただき、イエス様は、今もお休みになることなんかお出来にならずに、常に、父なる神の右の座にて、私たちのために代弁して下さっている」と言うほどに、私たちは祈りを分かっておりません。

即ち、私たち自身に執着しているということです。

聖書を見ますと、その内容は、私たちの計画や私たちの切実な思いや願ひに神がお応えなさるといふように話を組み立てたり、紐解いては行きません。

逆に、神さまが私たちに対して、私たちに向かって持つておられる目的と計画を私たちが気づき悟ることを願つておられ、そのご計画を成すために人生に神が関わつておられることを、私たち側が受け入れ、従ひ、忠誠を尽くしていくことの方が遙かに多く強調されております。

神の御旨が何なのかと尋ねる気持ちで御言葉を讀み、人と接し、神の御声を聞く気持ちで祈り、神の御心を探り悟るように生きることが求められております。

Part Two

「教会」という日本語に訳されているギリシア語の「エクレシア」という言葉は、「呼び出された者たち」、「呼び集められた者たち」という意味の言葉です。

つまり、私たちキリストにある群れ一人一人は、特別に神様の目的とご計画のうちに呼び出され、その目的と計画を知り、実行し、生きて行くために呼び集められた者たちだということです。

私たちの思いや願ひのために神が出勤されるのではなく、神さまの御心のために私たちが呼び出され、出て行くのです。

旧約聖書の中には、詩篇を始め、たくさんの人の祈りが記録されていますが、その中でも比較的良く知られている、預言者サムエルの母ハンナの祈りというのがあります。

ハンナは、胎が閉じられており、子供を妊娠することが出来ずにいました。

そのことのために、家庭内でも人間関係が上手くいかず、ひどく苛立ち、怒りが募っていました。

そして、その苛立ちと怒りをもって主の神殿に上り、激しく泣きながら、主なる神様に祈りました。

「なぜ、私に子どもを与えてくださらないのですか！ なぜ、子供がいないことのために、私が馬鹿にされ、恥辱を受け、プライドを傷つけられなければ

ばならないのですか！　どうか、私に子どもを与えて下さることをもって、私の恥を除き、私のプライドを立ててください」と、神さまにその思いの丈をぶつけました。

よくハンナの祈りは、神に対する信仰の熱心による祈りだと語られたりもしますが、実際のところ、その内容を見ますと、自分勝手なと言いましょか、子供の誕生を利用して自らのプライドを立てたいという願望、野望でした。

「何としてでも叶えて頂かないと困りますよ！」というような自分の計画、自分の執念、自分の願いや思いありきの訴えなんです。

ただ、この祈りを神さまは退けることはなさらずに、むしろ、ハンナの自分のプライドを立てたいというその思いを、叶えてあげているかのように応えて下さいます。

すると、そのようにして子供を与えられたハンナ自身は、「私が、この子を主にお願ひしたのだから、与えられた」と、自らの祈りの熱心さと言いましょか、自らの正しさを口にしてしまうような驕りが露わになりました。

でも、そんなハンナに、声を掛ける一人の男性がいました。　夫です。

サムエル記第一 1 : 23 (パワポ)

「ただ、主がそのおことばを実現して下さいように。」

夫のエルカナは、「ハンナが願う通りに主が叶えて下さいますように」とは言わずに、「主のご計画がなりますように。主の御旨がなりますように。主の御言葉がなりますように。ただひたすら専らに、主のお言葉が実現しますように」と、ハンナに、「ハンナさん。あなたの思いではなく、神の思いがなることが真つ当なことだし、神の思いそっちのけで、あなたの思いがなることだけに執着しているところから、ちょっと離れてみませんか。

私たちの思いと計画に神様を引っ張り出し、合わせて頂くような姿勢や生き方から、神の思いと神のご計画を悟り、神の御旨に従い合わせて、共に生きて行くではありませんか」と、やんわりと語り掛けます。

「なんと美しい夫婦の会話なんだろう！　と思います。

すると、そこから何年経ったのかは具体的に分かりませんが、数年後に祈ったハンナの祈りから、ハンナの信仰的な心境の変化が見て取れます。

サムエル記第一 2 : 2-3 (パワポ)

あたかも、ハンナ自らが横柄であり、神の前に多くを語り、神の御業や神のご計画よりも、自らの計画や自らの思いを先行させながら生きてきた自らの姿を顧みた結果得られた悟り、そして、神のご計画や御旨を求めながら生きて行くことの喜びや楽しみや感謝が表れているような祈りとなっています。

ハンナの独り善がりな祈りからこの地に生を許された幼子サムエルは、イスラエル史上最後の士師となり、また偉大な預言者として、神の言葉を語り、神の言葉に生きることの大切さや喜びや重大さを人々に宣べ伝える者となりました。

そしてハンナは、そんな神のご計画に圧倒され、恵みと哀れみを実感し、感謝を覚え、召し出された者としてその召しにふさわしく生きようとするものの真実さを（大切さを）知っていきました。

神さまは、私たちの弱さや未熟さや自分勝手さをよくご存じなお方ですが、その弱さや未熟さや自分勝手なところに安住しようと、信仰という名のもとに安住しようとする私たちのことを、放っておかれるようなことはございません。

私たちを呼び出したからには、その呼び出し、召しにふさわしく歩みたいと思えるところまで導いて行かれます。

じゃあ、神さまが導いて行って下さるから、私たちはただ何にもせずにジッとしていれば良いのかというと、そうではなく、召しにふさわしく歩もうとする、ハンナのような荒削りでもいいので、意志と行いともがきも同時に求められます。

Part Three

人が作り出した宗教は、元々、私の欲を満たしたいという貪欲が動機である道具ですので、叶えられるということが、何よりもその宗教の価値を押し量る上で大事なものさしになります。

何よりも先ず、私の願いや私の努力に対して、どういう結果を獲得させてもらえたのかが、その宗教を量るキーポイントになります。

でもキリスト教は、私たち人間が作り出した宗教ではなく、天地万物をお造りになったという事実をもとに、神さまから発信されたメッセージや私たち人間に対する美しい神の思いが先であり、そのメッセージや思いに、どう私たちが重なり合っていくのか、どう合わさっていくのか、どう従って行くのかがキーポイントになります。

つまり、そこにはやり取りがあるということです。

人の作りだした宗教は、詰まるところ、自分の願望を叶える道具のようなものですので、人格のやり取り、神との人格のやりとりというものがそこにはありません。

願った通りに動いてくれたのか、くれなかったのかということが、最大の関心事です。

しかし、まことの神との交わり、その御心やご計画に私の思いが重なり合っていくということには、否応なしに人格のやり取りが伴います。

接触があり、葛藤があり、もがきやあがきがあり、格闘もあるでしょうし、苦労や失敗もあるでしょう。

そうして、神さまは何としてでも、私たちの心を奪って行こうとされます。

盗んでとか、銃や刃物を突き付けて暴力的に奪うのではなく、「心を溶かして」、私たちの心が気持ち良いように、取って行かれます。

「私たち人間の心を溶かすことほど難しいことはないかもしれない」というほどに、私たち人間の心は頑なですね。なので、時間が掛かります。

私も思ったことがあります、「神さまが新約聖書的ではなく、旧約聖書的に導いて下さったらなんと分かりやすいだろうか」と思われる方が、この中にもいらっしゃるかもしれません。

こっちの道に行こうとしたら、突然目の前にある木に雷が落ちて、根こそぎ折れてしまった。

そして、「あ、神さまがお示しになっておられるのは、こっちの道ではなく、あっちの道何だな！」と、「分かりやすく示して下さいればいいのになあ」と思ってしまうことがあるかもしれませんが、人間そんな簡単に自分の思いを曲げようとはしません。

もし雷が落ちたならば、今度は避雷針を持ってでも、自分が進みたいと思っ
ている道なき道を進んで行こうと、我を通そうとするのが私たち人間の頑なさです。

地面がひどく揺れて車で進めないとすれば、ヘリコプターに乗ってでも、進もうとするのが私たちの我です。

エジプトのファラオのあの頑なな姿は、正に、私たち人間すべての者たちの頑固で、あくどい姿ですね。

そんな私たちの心を溶かそうと、心を溶かして、ご自身の思いやご計画や目的に、私たち自ら進んで合わさって行こうと、重なり合って行こうと、従って行きたいとなるように成し遂げなさるお方が、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神様です。

私たちの未熟な祈りにご自身の耳を傾け続け、強情な行いをひとまず見てみぬふりをされ、不憫に思われながら、じれったく思われながらも、その中で私たちを待ちつつ、ほのめかしながら導いて行かれます。

人として生まれたからには、すべての人間に、神さまはそうしておられます。

なぜそうなさるのか？

神は愛だからです。

愛は、一方通行なものではなく、相互の行き交いが愛です。

愛は応答があって初めて愛であり、その応答は強制でもなく、お金や物品を貰ったからでもなく、自発的に、相手のその思いに同意と合意をもって、喜んでいのちを掛けて応えるようになるのが、愛です。

神さまは愛なるお方ですから、ほのめかしながら、私たちを待っていて下さるお方ですが、待っているからといって、放任されるようなことはありません。

断崖絶壁から落ちて大変なことになりそうな時には、そっちに行つてはいけないと、一鞭入れたり、手を差し出されることがあります。

危ないからご自身の手を出して引っ張って下さったのに、「何で引っ張るんですか!」と、「何で叩くんですか!」と抗議をしながら、「苦しみにあった!」と、「困難にあった!」とお、見当違いな訴えを繰り返したり、結局手を振り払ったせいで、絶壁から落ちてしまうことがあります。

そっちに行ったら取り返しのつかないことになるから、手を出して下さったのに、「引っ叩いた!」と、「殴った!」と訴えます。

それでも神さまは、私たちが「はい、全くその通りです。天にも地にも、あなた様以外、私の喜びはなく、私の財産はなく、私の愛するお方はおりません」と、心溶かされ、プログラミングされた何かのロボットのようにではなく、全くもって自らの自由意志によって告白するところへと私たちを導いて行こうとされます。そして、そこで、私たちは神との愛の関係にあることの深遠さを知ります。

Part Three

そんな愛へと、私たちを今も至らしめようと努めておられる主イエス様の忍耐ととりなしとお働きに関して、美しく例えている例え話があります。

ルカの福音書13：6－9（パワポ）

「ご主人様、もう1年だけ待ってください。私が1年間さらに肥料をやり、さらに丹精込めて育て上げますから。その時実が無かったら切り倒してください。もう1年、時間を下さい」と訴えるこの番人こそが、イエス・キリストご自身です。

今も休まず、私たちのためにこうして下さるお方がイエス様です。

1年どころか、「そうなるまで」、私たちを導いて行かれます。

私たちは罪深い者ですから、「そうなるまで」には、致し方なく数多くの試練と困難の中を通らなければならず、その度毎に、自らの願いに執着し、神さまに要求し、訴え、叫び、求めるでしょうが、それでも主なる神様は、私たちの口から神への愛を喜んで告白する者へと変えて下さるでしょう。

そして、呼び出された理由を、召し出された理由を知り、その召しにふさわしく歩みたいと思える者へと変えて下さり、今も変えようと神は働いておられます。

そして、その召しの内容を一言にまとめたのが、エペソ書4：2－3の言葉です。

エペソ人への手紙4：2－3（パワポ）

これがすべてだと、これが人にとって最も大事なことだと、この世界にあつて

大きく欠落している核心的内容だと、私という人間に欠損している要素だと、神が私たちに今も変わらずして下さっている恵みの内容だと、イエス様そのものだと、もちろん完璧に出来ることはないかもしれないけれども、こう生きたい、こうありたい、このようなキリスト者でありたいと思い実践出来るようにと、私たち召し出されております。

教会において最も大きな痛みが何なのかと言いますと、キリスト教的専門用語を駆使して、礼拝を含めて宗教的な儀式や行事や事業を多数執り行うものの、それらと私たちの言葉や態度や生き方が、調和を成していないということではないでしょうか。

どれだけ多くの方々が、そのことに躓きを覚えてきたことか分かりません。

でも、それでも、こうして今繋がり続け、礼拝に出席し、神の言葉を求め、神の言葉に励まされ、神の言葉に従うように生きたい、変えられたい、変わりたい、変わろうと思えることが、どれだけ大きな恵みだろうかと思うのです。

Conclusion

私事で申し訳ないのですが、先週金曜日のスタッフミーティングの中で、まだ一度も会っていない方のことを思わず、「うざい！」と言ってしまいました。

その高慢さ、浅はかさ、信仰の無さ、口を制御することの出来ない未熟さ、愛の無さ、まことの神様を差し置いて、自分が神となって人を裁いていることに優越感を覚えている残忍さ、そして、ご自分の居ないところで、他の誰かに、「うざい！」と言われていることを露ほどもご存じないその方に対して申し訳なく、その不満の言葉を聞かせてしまった他の牧会スタッフにも申し訳なくて、牧師館の仕事部屋で、ずっと悶々としていました。

まだまだ全然全くもって、イエス様の愛が分かっていないですし、信仰のうちに、神の前に、降伏も降参も出来ていない身勝手な私自身の姿を見ました。

「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」という言葉が、深々と迫って来ました。

「せっかく神さまが呼び出して下さったのだから、その召しにふさわしく生きたいと、生きなければと、まだまだ生きることが出来ていない」と、事新たに示されました。

「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい」という使徒パウロ先生の御言葉が、私たちのうちになりますよう祈ります。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ4：1b